慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書物としての『枕草子抜書』
Sub Title	A bibliographical study of "The pillow book extract"
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2014
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.49 (2014.) ,p.97- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20140000-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書物としての『枕草子抜書』

佐々木　孝浩

はじめに

稿者は先に「定家本としての『枕草子』―安貞二年奥書の記主をめぐって―」（谷知子・田渕句美子氏編『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院、二〇一二）において、「三巻本」と称される系統の伝本に存する、安貞二年奥書が藤原定家のものと推定されたままに放置されてきたことを問題とし、これを確定させると共に、呼称も「定家本」と改めることを提唱した。

推定と確定とそれほど距離がないように思われるかもしれないが、定家本と確定できることによって、その本文や勘物の受容研究における資料的な価値がまるで異なってくることを、良く考えてみていただきたい。その僅かな一歩を踏み込むことによって、研究の様相が劇的に変化するのである。[1] この様な事例は他にも少なくないのではないだろうか。

これとはやや性質が異なるが、やはり少し踏み込んだ研究を行うことによって、見えてくるものが変わってくることを、同じ論文で簡単に指摘した。その対象としたのは「定家本」の抄出本である『清少納言枕双紙抜書』である。同本についてはそれなりの研究の蓄積があるにも拘わらず、その成立の理由などは不明のままであった。ささやかな踏み込みとは、その伝本の書誌学的な特徴に注目することであり、それを行うことにより、

この抄出が連歌の参考書として編纂されたものであると推定できたのである。

そこでの考証は不十分なものであったので、本稿では改めてその伝本の書誌を詳しく説明した上で、その注目できる特徴についても本格的な検討を行ってみたいと考える。それは書誌学研究が、日本古典文学研究にどのように役立つのかを示す一例ともなるはずである。

一　研究史と伝本

『清少納言枕双紙抜書』（以下「抜書」と略称）について最初に報告したのは、『枕草子』伝本研究史上極めて重要な業績を残した池田亀鑑である。「枕草子の抜書本の本文系統について」（『随筆文学』（至文堂、一九六九）、初出「清少納言枕草子研究」『国語と国文学』五―一、一九二八・一）において、「清少納言枕草子には二、三の抜き書き本が伝えられている」と述べ、「かつて自分の眼に入ったもので、内容を比較検討しておいた本は次の二、三種である」として、宮内庁書陵部蔵本を取り上げ、条項と丁数を示して、「章段の立て方といい、文章といい明らかに三巻本から抄出したものである」と指摘している。さらに、書陵部蔵本と「全く同様の本」である京都大学所蔵本と、「宮内庁本と同一のものではない」、「五巻の古活字から抜かれたものである」近衛家所蔵本を紹介し、末尾に「抄略本はまだこの外にもどこかに伝えられているであろう。たしか、松井簡治博士も、古い抄略本をお持ちと博士御自身から承っているが、まだ見せていただかない。抄略本などは、どうでもいいという人もあるが、異本の研究の上からいえば、決して軽んずべきではない。十分研究する価値がある。そういう残簡零冊の中に、異本展開の相をまざまざとえがくことができるからである」と、他の伝本の指摘と、抄出本研究の意義を明らかにしているのである。「抜書」研究においても、先駆的で重要な研究であると言わざるをえないものである。

この後、楠（光明）道隆は「枕草子異本研究（下）―類纂形態本考証―」（『枕草子異本研究』（笠間書院、一九七〇）、初出『国語国文』四―七、一九三四・七）において、「京大研究室蔵の抜書本枕草子は三巻本系統本の抄出本であつてその内容が大部分類聚段から成立してゐる」と指摘し、さらに「枕草子三巻本両類本考」（同、初出『国語国文』五―六、一九三五・六）

においても、京大本が「三巻本系統をかなり自由大膽に抜書したもので」、その底本は三巻本の二類の内の第一類完本であると考えられると記している。

「抜書」について初めて本格的な研究を行ったのは田中重太郎である。田中は「校本　枕冊子抜書本」（『校本枕冊子　附巻』古典文庫、一九五七）において、吉田幸一蔵本を底本にして影印も付し、書陵部・京都大学本の他、静嘉堂文庫蔵本（松井簡治旧蔵）・東山御文庫蔵本を対校本とする校本を作成しており、諸本の書誌学的解題も詳細である。ここには戦争により刊行できなかった、「『清少納言枕双紙抜書』翻印並に解説」（『立命館大学論叢　国語漢文篇』五、一九四三・八刊行予定であった）の、「抜書」の性格について述べた部分の抄録が付されており、やはり「抜書」は三巻本（定家本）の第一類本に拠ったものであることが指摘されている。

田中の校本と同年に岸上慎二も、「三巻本の抜書本」（『枕草子研究』（新生社、一九八〇）、初出『文学部研究年報（日本大学）』七、一九五七・三）において、「抜書」の性質について詳細な報告をしている。「抜書」は「親本の三巻本から古く分岐し、孤立した関係において伝流したらしく、他系統本などからの洗礼を殆どうけてゐず、従つてその純粋さが今日においてもよく保たれてゐるやうに認められる」とし、三巻本の研究の重要な資料になるものと評価し、「諸本」の項目のもとに、校本と同じ五本についての詳細な書誌情報を記した上で、それぞれの脱文と増補の様相を丁寧に確認して、静嘉堂文庫本の本文が最も優れており、他の四本に見られない古色があることなどを指摘している。また「組織」項では、一つ書の形式の約一〇三段の構成を有し、その順序は三巻本（定家本）と大体は等しいが、一部に序列の相違が見られることを、「内容」項では抜萃の傾向を統計的に確認し、類聚章段が多く取られていることを追認して、「大体、清少納言枕草子のダイジェスト版を方針として編成されたものと考えられる」と整理している。さらに「成立年時」項では、東山御文庫本が後小松天皇宸筆であると認められることから、三巻本（定家本）に共通して存する奥書の安貞二年から後小松天皇までの間の、後小松天皇に近い時代に分岐したものと考えられること、また「類聚章段のなるもの型が少いところなどから、男性の風雅を目的とする抜書的色彩が濃いとも推定されはしないであらうか」とも述べている。その上で、「三巻本現存本文への寄与」項として、「三巻本一類の闕失部に

ついては考へるべき多くの材料が与えられ」、「現存の三巻本の本文について一類・二類を問はず好箇の研究資料とな」ることを確認している。田中の校本と共に「抜書」の総合的な研究として重要な業績であることは言うまでもない。

この後、榊原邦彦が最善本とされる静嘉堂文庫蔵本を底本として、「枕草子抜書本文及び総索引」（『枕草子論考』（教育出版センター、一九八四）、初出『国語学論集』一、一九七八・三）を発表し、同年に「枕草子抜書本について」（同、初出『平安文学研究』六〇、一九七八・一一）において、三巻本（定家本）第一類本の欠失部分の考察や第二類本当該部分の本文校訂に抜書本を利用して、その存在価値を明らかにしている。

また榊原は先述の翻刻に、『枕草子絵巻詞書』の翻刻も加えた、『枕草子抜書』（笠間書院、一九八一）を刊行し、解題において、その成立を前記岸上論文と同様の理由で、「鎌倉時代であり、遅くとも室町時代初期までと推測せられる」と述べている。(2)

以上非常に簡略ではあるが、「抜書」の研究史を纏めてみた。無論『枕草子』研究の主流となるはずもないが、相応の蓄積があることや、「抜書」が『枕草子』の伝本や本文の研究、特に定家本の考察において重要な存在として利用されてきたことが確認できたものと考える。

二　伝本の書誌情報

「抜書」の伝本は上述の先行研究によって五本を確認できるが、楠道隆「枕草子の諸本」（『枕草子講座3　枕草子とその鑑賞Ⅱ』有精堂、一九七五）の「四　抜書本」では八本が紹介されている。その末尾に挙げられた「（8）岸上慎二氏蔵本（武藤元信氏旧蔵）一冊」は、『校本枕冊子　附巻』にも翻刻されている別種のものであるが、「（6）陽明文庫本（近衛家熙筆）一冊」と「（7）多家本（多忠勇筆）一冊／寛政十年（一七九八）」を含めた七本は、「全部同類のもので、内容もほぼ同じである」とされている。

新たに加えられた陽明文庫本と多家本は、他の五本と共に、『国書総目録』「枕草子」項に「陽明（「枕草紙抜書」、近衛家熙写一冊）」・「多家（「拾芥抄令集解枕草子抜書」、寛政一〇多忠勇写一冊）」と記載されてもいるのであるが、前者については、先述の池田の指摘の他に、榊原邦彦「陽明文庫蔵清少納言枕草子抜書」（『芸文東海』一、一九八三・六、後に『枕草子論考』

（教育出版センター、一九八四）に収載）で詳しく検討されており、「「正月一日は」の段に始り「みくるしき物」の段に終る」別種の抜書であり、抄出母体も能因本であることが指摘されている。多家本についてはこれ以上の情報が無く、同内容のものかどうかは未詳である。本稿では従来から知られている五本を対象として、以下の考察を進めていくこととしたい。

先述したようにこの五本については、田中重太郎「校本　枕冊子抜書本」と、岸上慎二「三巻本の抜書本」でかなり詳しく書誌情報が報告されている（以下田中・岸上両氏の論文の引用はこの二本に拠る）が、内四本については閲覧をお許しいただいたのでその調査記録を加味して、実見できなかった東山御文庫本については先行研究と複写資料を用いて、より詳しくその書誌を説明してみたい。

清少納言枕雙紙抜書　明応五年（一四九六）智盛写　折紙綴葉装一帖　静嘉堂文庫（二〇五・五）　（略称「静嘉本」）

後補藍色表紙（二二・一×一三・三糎）。外題は中央の素紙原題簽（あるいは共紙表紙の打付書き部分切抜きカ、一〇・五×二・八糎）に「清少納言枕草子」（本文別筆カ）とある。内題「清少納言枕雙紙抜書／上之上」（「枕草子上之中（下）」・「枕雙紙下之上」・「枕草子下之中（下）」）。料紙薄手楮紙（全丁裏打ち補修済）。遊紙前一丁。半葉八行、字面高さ約一八・八糎。墨付五二丁（裏見返し含む）。奥書は裏見返し左に「明應五年十一月　日　智盛（花押）」とある。僅かに見せ消ち訂正がある程度だが、その墨の濃淡が二色あるように見える。異筆も混じるのかもしれない。五一丁裏には、本文同筆の小字で左のような書き入れがある。

春雨に木葉みたれてむら時雨それもまきるゝかたはありけり／人なししむねのちふさを思ひ〔出〕てやくすみ染の衣きよ

君子のなかされたるに／雲や風松にやとれる今朝の雪　紹○（千句）

よみてつかはす也

文明十九三月廿一日

めてよ神さはちらさしな春の花／なれし世をむなしき花の（名号）

嵐哉　同○　ならひあれ神（花）と人との千世の春（同日）

印記は、遊紙表右下に「松井／蔵書」（楕円朱、松井簡治）があり、その左下に、旧蔵者のものかとも考えられる奥書のものとは異なる花押が記されている。先述の翻刻の他、『マイクロフィルム版静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成』（雄松堂、一九七四）に収載され、岸上に巻頭・奥書図版がある。

清少納言枕双紙抜書　永禄三年（一五六〇）写　袋綴一冊　相愛大学図書館（九一四・三S　春三二一）（略称「相愛本」）

後補転用黄土色地弥次郎兵衛繋文刷表紙（二一・一×一六・二糎）。外題は左肩柴染色（黄みの灰茶色）地龍文題簽（一二・〇×三・〇糎）に「枕草子抜書　宗祇」と、本文同筆と思われる手で記されており、原題簽を改装後にも用いたものと思われる。内題「清少納言枕双紙抜書／上之上」（「枕草子上之下」・「枕草子下之上」・「枕双紙下之中（下）」、＊「上之中」ナシ）。料紙薄手斐紙。遊紙前後各一丁。半葉一〇行、字面高さ約一九・〇糎。墨付三六丁。奥書は三六丁裏に、墨色や筆が異なり本文とは異筆とも思われる手で、

此一冊宗祇法師抜書侍云々

永禄三年上章哺時南呂初六天

とある。殆ど書き入れはなく、僅かに本文同筆で補入・見消ち・重書きがある。この他に五丁表六行目の頭に同色不審紙があるが、「も」とあるべき文字が「に」とも読めることによるものか。印記は、一丁表右上に印文不明の子持枠朱長方印（三・〇×一・五糎）、同右下「寶玲文庫」（朱）の他、裏遊紙裏左下に「月明荘」（朱）がある。古書肆弘文荘で誂えた帙の題簽に「幸」一字の朱印が捺されており、吉田幸一旧蔵であると確認できる。他に帙に一九九一年一月三〇日の春曙文庫の受け入れ印あり。田中重太郎『校本枕冊子　附巻』（古典文庫、一九五七）に影印があり、岸上に巻頭・奥書の図版がある他、『相愛大学相愛短期大学図書館蔵春曙文庫目録（和装本編）』（一九九三）に表紙・一丁表裏・奥書のある三六丁裏の図版がある。

清少納言枕草紙抜書〔近世初〕写　袋綴一冊　宮内庁書陵部（二〇六・八三五　松岡本）　（略称「書陵本」）

後補渋刷毛引表紙（二七・〇×二一・八糎）。外題は左肩打ち付けで「枕草子抜書」とやや乱暴に書す。内題「清少納言枕草紙抜書／上之上」（「枕草紙上之中」、「枕草子上之下」、「枕草子下之上（中）」、＊「下之下」ナシ）。料紙楮打紙。見返し厚手楮紙。遊紙ナシ。半葉一一行、字面高さ約二五・五糎。墨付二八丁。奥書ナシ。印記は、一丁表右上に「帝室図書」（方朱）。各内題上部と一つ書の「一」下部に朱〇印がある他、朱合点・平仮名朱ルビ・朱濁点と、平仮名墨ルビあり（共に本文同筆カ）。里村紹巴に似た筆跡。上下喉の余白が狭く、本来はもう一回り大きな本であったと考えられる。岸上に巻頭・「木の花は」段

の図版がある。

清少納言枕双紙抜書〔江戸初前期〕写　袋綴一冊　京都大学文学研究科図書館（国文学Ｌｊ１３）　（略称「京大本」）

後補薄赤香色地赤香色刷毛引表紙（二七・三×一八・九糎）。右肩に阿波国文庫蔵書標を剝がしたと思われる痕跡がある。外題は墨流し題簽（一八・〇×三・五糎）に「清少納言枕双紙書略本」とおそらく識語と同筆で記される。内題「清少納言枕双紙抜書／上之上」（「枕草子上之中（下）」・「枕草紙下之上」・「枕草子下之中（下）」）。料紙楮打紙。遊紙ナシ。半葉一一行、字面高さ約二四・二糎。墨付二五丁。奥書は二五丁表に本文末尾から一行空けて、本文異筆と思われる朱筆で本文より小さく三字下げにして、

天文十九年六月廿六日かなつかいふしん見候へ共
本にまかせて写候

とある。後述のように本文に朱筆書き入れが多数あることからすると、対校本の奥書であろうか。また同丁裏に朱筆と同筆かと思われる墨書で、

此一帖古写本也季吟子の抄せる一時軒か
傍注書たるに用し本とはたかへる所多し
たゝその全部を見さる事をうらみとすもと
六帖にわかてる本なるへし此双紙むかしより
広略の本ありて写つたへたる所大同小異
まち〳〵なるいつれか是なる事をしらす
白華房
主人

との識語がある。「白華房」は、田中・岸上共に天野信景（一六六三～一七三三、尾張藩士の国学者）かとする。印記は一丁表右下に「楓□」（長方朱陰刻）、その上に「不忍文庫」（長方朱子持ち枠）、さらにその上に「阿波国文庫」（長方朱子持ち枠）あり。他に「京都／帝国大学／図書之印」と大正一〇年一一月三日の受入印あり。天文本奥書と同筆と思われる補入や振漢字などの朱筆の校合によるかと思われる書き入れの他、朱色不審紙多し。本文は三藐院流の流れを汲むと思われる筆跡である。識語の筆跡を、森繁夫『名家筆蹟考』（横尾勇之助ほか、一九二八）所載の信景の短冊や、早稲田大学図書館蔵の信景自筆『事言籍』等と比較してみたが、識語が走り書きである為に同筆か否かの判断は難しい。

清少納言枕双紙抜書　〔室町初〕写・伝後小松院筆　〔綴葉装〕
一帖　東山御文庫（一三五・六）　（略称「東山本」）
後補〔褐色〕一二弁菊五三桐唐草文緞子表紙（〔一四・四×二二・〇糎〕）。外題ナシ。見返後補〔金銀砂子小切箔泥〕八重菊七五桐雲霞文。内題「清少納言枕双紙抜書／上之上」（「枕草子上之中（下）」、「枕双紙下之上」、「枕草子下之中（下）」）。料紙は〔金銀泥〕下絵を施した雲紙と〔鳥の子〕の混用。遊紙前一丁・後四丁。本文裏始り、半葉一九行中心、一八～二二行、字面高さ不明。墨付二七丁。奥書ナシ。印記ナシ。〔享保二〇年（一七三五）七代古筆了延極札〕（校本の岸上提供情報）。前稿でも記したが、本書の筆跡については、岸上が「伊地知鉄男・橋本不美男の両氏の御意見としては後小松天皇筆といつて先づ誤りないだらうと御助言を賜つた」と記している。改めて、後小松院真筆とされる東山御文庫蔵その他の短冊や、大東急記念文庫蔵鴻池家旧蔵手鑑他の「後小松院百首」切などと比較をしてみると、確かに良く似通ってはいる。断言するのは難しいにせよ、書流は同一であり、時代的には後小松院在世（一三七七～一四三三）頃の書写であることは疑いないと考えられる。岸上に巻頭・二丁表の図版がある。

三　伝本の関係

以上の五本の関係については、脱文、増補などを精査した岸上が、「静嘉堂文庫本がもつとも少なく、次は吉田氏本（稿者注・相愛本）、その他の三本はほゞ同じ数である」、「直接の母子関係は見られず、親しさうであり且つ疎さをも併せもつてゐる」と指摘している。さらに語句の誤脱衍についても検討し、「静嘉堂文庫本の本文の優秀性は動かし難いものがある」とし、「五本相互の関係は、近きが如く又疎なるが如き状態」で、「比較的にといふ関係でいへば、静嘉堂文庫本とその他とでは早く袂を分つたものと見え静嘉堂文庫本には他の四本に見られぬ古色があり」、「他の四本は比較的に近い。しかしこの四本も直接の親子関係にはなく、東山御文庫本と、京大本とは、屢々同一の誤りを示してゐて、もつとも近い関係にあり、吉田氏本は、宮内庁本と近いと指摘出来る。しかし、又やや遠い筈の京大本と宮内庁本とにおいて、京大本が宮内庁本の字詰の一行分を脱することの二箇所あるが如き状況も両本の近さを思はしめるも

のがある」などと纏めている。また、内題の「抜書」という語を共通して有しているものの、東山本のみはこれを小書にしていることを指摘し、「このところに書写の一番古いと考へられる東山御文庫本の貴重さが示されているゐるやうに考へられる」とも述べている。

五本が直接的な関係がないことは明らかなようであるが、その再確認には、書誌情報の整理からも伺えるように、内題の有様を比較するのが良さそうである。最善本とされる「静嘉本」を基本として、他本の相違箇所を一覧にしてみたい。「静嘉本」の傍線は異同のある箇所を示し、他の四本については、「○」は同一であることを意味し、文字は傍線に対応する異同である。

	静嘉	相愛	書陵	京大	東山
清少納言枕双紙抜書／上之上	○	草	○	抜書（小字）	
枕草子上之中	ナシ	紙	○	○	
枕草子上之下	○	○	○	○	
枕双紙下之上	草子	草子	草紙	○	
枕草子下之中	双紙	○	○	○	
枕草子下之下	双紙	ナシ	○	○	

これを一覧すると、「双紙・草子・草紙」の宛て方が統一されておらず、同じ本の中で区々であることに驚かされる。それはともかく、このばらつきが諸本の関係の確認には好都合であると言える。これに拠ると、書写の最も古い「東山本」とこれに次ぐ「静嘉本」が、「抜書」の大小を除くと、不規則な「双紙・草子」の変化が完全に一致していることが判る。また書写が最も新しい「京大本」が、下之上以外はこれらと共通しており、岸上の「東山本」と「京大本」が最も近い関係にあるとの指摘を、ある程度裏付けられそうである。一方「相愛本」と「書陵本」も近いとされるが、共に異なる部分で内題を欠いており、また「双紙・草子・草紙」の宛て方もかなり異なっていて、あまり近いようには見えない。

この一覧をみる限り、「静嘉本」・「東山本」はかなり近く、「京大本」もこの両本に近いが、他の「相愛本」と「書陵本」はそれぞれ孤立してこれらと異なっていることが判るのである。内題のみで確実な傾向が判断できないのは当然なことであるが、「東山本」と「京大本」が誤りの点で近いという岸上の指摘を一応追認できるのは、決して偶然ではないであろう。

この内題のあり方で確認できた傾向が、本文でも認められるのかを、冒頭章段の校合を行って検討してみたい。ここでは書写の最も古い「東山本」を底本として、他の四本は書写年代順に並べ、改行箇所は不問として、本文の異同と漢字仮名の宛て方を対象として、校異表を作成してみた。

1東　・春は曙・・・やう〳〵しろくなりゆく／山きはすこ
静　明・ほの　行・　わ
相　明・ほの　成・行・
書　あけほの　成・行・
京一　あけほの（朱）　行・

2東　しあかりてむら／さきたちたる雲・のほそく／たなひ
静　引
相　くも　引
書　引
京　引

3東　きたる夏はよる／月のころさらなりやみも猶・／蛍
静・　也・　なを
相・　比・　也・闇・
書・　夏・・　更・也・闇・は猶・　ほ
京・　なを

4東　・・のおほく飛・ちかひ　又たゝ一・・／ふたつほ
静　とひ　たる　ひとつ
相　とひ　たる
書　たる　飛　たる　只・　二・・
京　とひ　たる

5東　のかにうちひかりて行・も／おかし雨なとふるもおか
静　を　を
相　光・・ゆく　を　を
書　光り・ゆく　に
京

6東　し・秋は／ゆふくれ夕・日のさして山の端／いとちか
静　夕・暮・　は

相　夕・　ゆふ　は
書　夕・暮・　日　は
京　一　夕・暮・

7東　う成・たるにからす／のねところへゆくとてみつよつ／
静　なり　所・・　三・
相
書　成・
京　なり　三・四・

8東　ふたつなと飛・いそくさへ哀・・也・／まいて雁・
静　二・・　とひ　あはれ　・・・
相　飛・
書　二・・　飛・　哀・・なり　かり
京　とひ　な（見消ち記号・共朱）

9東　なとのつららねたるか／いとちひさくみゆるはいとお
静　見
相　い　を

書　・・　い　見
京　・・　い　見

10東　かし／日入はて、風の音・むしのねなと』はたいふへ
静　をと虫・
相　虫・
書　をと　音
京

11東　きにもあらす冬・は／つとめて雪のふりたる・・いふ
静　さま
相　云・
書　ふゆ　雪
京

12東　へ／きにもあらす霜のいとしろき／・・・さらても
静　も又・
相　も又・
書　霜　白・　もまた

京　　　　　　　　　　　　　　　も又・

13東　いとさむきに火など／急・・おこしてすみもてわたる
静　　　　　　　　　いそき
相　　　　　　　　　いそき　　・炭・
書　い（ぃ）寒（さむ）・　　　急（いそき）・・
京　・・（いと（朱））　　　　　いそき　　　炭（朱）　　　・・・（○（朱）＊）

14東　も／いとつき〳〵しひるに成・て／ぬるくゆるひもて
静　に　　　　　　　　　　なり
相　　　　　　　　　　　　なり
書　　　　　〴〵
京　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

15東　いけは／すひつ火おけの火も白・・／はひかちになりてわろし
静　　　　　桶・　　　しろき灰・　　成・おかし
相　　　　　を　　　　しろき　い　　　　　ひ
書　　　び　火桶（ひおけ）・　白（しろ）・き　い　　　　　ひ
京　　　　　　　　　　しろき　い（灰（朱））　　　　ろ（る（朱））

＊…左下の余白に朱筆で「○わたるもいとつき〳〵し（昼）になりてぬるくゆるひもて」と書入れ。

具体的な検討の前に説明しておきたいのは書式の違いである。この「抜書」は一つ書の形式を採っているのであるが、最初の「春は曙」段には諸本「一」がなく、書写の新しい「京大本」のみがこれを有している。また「京大本」は、「秋は」部分で「一」はを付して段落を改めており、初段を二分しているのである。また「静嘉本」は「一」こそ付さないものの、春夏秋冬の変わり目で改行している点は独自である。

さて、この校異の状況を概観して気付くのは、漢字仮名の宛て方において、「東山本」と「京都本」が比較的近い関係にあるということで、先の内題表記の把握と同様の傾向を確認できるのである。「京大本」は13〜14行目の脱文を始めとして本行にはやや傷が多く、天文一九年本との校合に拠ると思われる朱筆の書き入れによって補正されている。ただその朱筆に問題があることもあり、初段末尾の「わろし」も朱筆訂正で「わるし」とされるが、「わろし」は「東山本」と同じであり、定家本も

この形である[3]ので、このままで良いと思われる。田中の校本を参照すると、下之中「物語は」段で冒頭の「住吉」を欠くなど、「東山本」と「京大本」は共通する異同や脱落が目立つのであり、やはり五本の伝本中では最も近いしい関係にあると言える。

しかしそれも総体的なものであり、「東山本」が欠く上之上「わたりは」段や、下之上「近うて遠きもの」段と「遠くてちかきもの」段にまたがる脱文などは、「京大本」は本行で有しており、直接的な関係を有していないことは明らかである。

また内題ではほぼ完全な一致を見せていた「東山本」と「静嘉本」については、校異を見る限りそれほど近い関係にあるとは考え難いようである。上之中「なまめかしきもの」段がこの見出しを欠き、前段の「めてたき物」と一体化して記されているのは、「京大本」を加えた三本の共通性として注目できはする。しかしながら初段に限定しても、8行目の「まいて」を欠く、11行目に「さま」を有する、段末を「おかし」とするなど、「静嘉本」に独自異文が目立つのは気になるのである。この「おかし」は否定的評価でなければならない箇所で、やはり定家本や「東山本」等の様に「わろし」とあるのが穏当で、聊か問題のある箇所と言える。

最善本とされる「静嘉本」には、上之上「うへにさふらう御猫」段の「乳母馬命婦」、「小野右府記　長保元年九月十九日　日来(別筆カ)内裏御猫／産子　女院左大臣　右大臣　有産養事　有衝重垸」飯納苔衣(ママ「筥」)等云々[4]」等、他本にはない勘物を有していたり、下之中「雲は」段で他本が「あまくもいとをかし」とする箇所を、「あま雲　あけはなるゝ程のくろき雲のやう〳〵消てしらうなり行もいとをかし」とするなど、確かに他本より優れていると思われる点もあるが、「東山本」よりも後の書写でありながら独自な点が目立つことは、定家本完本との確認的な校合を経た可能性も考えられる。この他にも上之下「原は」段を欠くなどの問題点もあり、「静嘉本」は単独で「抜書」を代表する伝本として用いることは難しいと思われるのである。

内題では大きく異なっていた「相愛本」であるが、初段に関しては「東山本」とそれ程大きな違いがある訳ではない。上之中の内題を欠くものの、これは頁移りの際の書き落としかとも考えられる程度のことであり、この他に大きな欠脱も確認できず、田中が校本の底本として採用したことも納得できるのである。

初段でも「東山本」と最も漢字仮名の宛て方が遠いと言える「書陵本」だが、下之中「やしろは」段に唯一、「あま雲のたち

かさなれる夜半なれは／　ありとほしともおもふへきかは」と、初行一字下げで本行に記されている。この歌は歌本文にやや異同はあるものの、『貫之集』に長い詞書と共に納められているものであるが、定家本の勘物には見えないので、「抜書」成立以後の後人の注記が本行化したものであるかもしれない。

以上の非常に簡略な確認の範囲でも、この五本の間には直接的な書承関係はないことはもちろん、また「東山本」と「京都本」のやや近いことを除いて、それぞれの本文にも距離があることが判った。このような状況に至るには、「京大本」の校合奥書で窺われる天文一九年（一五五〇）本を始めとして、現在失われた伝本が数多く存在していたと考えざるをえないであろう。また室町写本が三本も存在するのに対し、江戸写本は初期の二本しか確認出来ないことを併せ考えると、「抜書」は室町時代にはかなり流布していたものの、江戸時代になると需要が減ってあまり書写されなくなったものと推測されるのである。

四　連歌書としての性格

室町時代にはかなり需要があって、江戸時代になるとそれが減少するという状況から思い出されるのは、やはり連歌の消長ではないだろうか。室町時代には、地方のそれほど身分が高くない武士達にも連歌愛好者が多くいたことは、宗祇の『筑紫道記』や、宗長の『宗長日記』、宗牧の『東国紀行』等の連歌師の紀行類にも明らかである。江戸時代になって連歌が廃れた訳ではなく、連歌から派生した俳諧連歌の方が次第に人気になったことは良く知られていることであろう。南北朝末室町初期写の東山本に始り、一七世紀前半頃写の京大本までという、五伝本の書写年代の幅は、連歌の最盛期とほぼ重なるものであることは、決して偶然ではないと考えられるのである。

このような「抜書」と連歌との関連性を意識しつつこの五本を見渡すと、自ずと目に付いてくるのは、先にも少し言及した「一つ書」の形式である。『枕草子』は「抜書」の母体となった定家本は勿論、能因・堺・前田の各系統もこの形式をしていないので、抜き書きされた段階でこの形式が採られたものと考えられる。

実はこの「一つ書」という形式は、連歌の論書・学書の類に多く見えるものなのである。代表的な式目書である二条良基が応安五年（一三七二）に制定した『連歌新式』、同じ良基の『僻

連抄』や梵灯庵の『梵灯答庵主返答』等の連歌論書、宗祇の付合書『連歌付合物之名（宗祇初心抄）』等々、「一つ書」は連歌関連の書物には枚挙に暇が無いほどに存在する。「一つ書」が連歌の専有物であるわけではないが、「抜書」が連歌書に属するものであることを、この形式が如実に物語っていると思われるのである。

こうした見方の正しさを検証するために、個々の伝本について連歌書としての要素を書誌学的な見地から探究してみたい。

「静嘉本」はその装訂からして連歌との関係を濃厚に示していると言える。折紙綴葉装という装訂は、綴葉装が両面書写が可能な、厚みのある上質で高級な斐紙や楮打紙を用いるのが基本であるのに対して、両面書写が不可能な、袋綴に用いるような薄手の楮紙を用いて、下辺に折目がくるように折った紙を重ねて、綴葉装の綴じ方をしたものであり、安価に見栄えが良い本を作成できるだけでなく、通常の綴葉装に比べて大変軽く仕上がるのである。何時頃から用いられたものであるのかはっきりしないのだが、室町時代から江戸初期頃にかけての使用が目立つことからすると、連歌懐紙が下辺に折目のある折紙を用いることから発想されて、発明されたものである可能性も考えられよう。

そしてその遺例も、名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵の、猪苗代兼載が文亀三年（一五〇三）七月一五日に、会津黒川で『竹林抄』を講じた際の聞書きの原本である『竹聞』横一帖（911˙204-Ti）や、国文学研究資料館蔵の室町後期頃写の『秋篠月清集』[5]一帖（九九・七八）などのように、連歌師周辺で用いられていたと考えられるものが多いのである。旅に書物を携帯することの多い連歌師にとっては、軽くて見栄えも良いということは大変に望ましい特性であったことであろう。僧侶や医者といった、やはり移動という共通性を有する職種の人物達の使用も認められはするが、「静嘉本」は内容からしても連歌関係者の書写になるものである可能性は極めて高いと思われるのである。

その書写者の智盛は伝未詳で、連歌の作者であったことも確認できないが、岸上も「連歌関係か僧侶ではないかと思ふ」とするように、その名からしても連歌と縁の深い人物であると見て良さそうである。その推定の正しさを裏付けると思われるのが、五一丁裏の書き入れであり、先に翻刻しておいたが、始めに記された和歌二首は、「春雨に」歌が定家『拾遺愚草』「閑居

百首」中の一首（三〇八）、「人なしし」歌は『拾遺集』歌（一二九四）である。これに続く連歌四句の出典は確認できていないが、「千句」・「文明一九三月廿一日」・「名号」・「同」等の注記があり、「紹○」・「同○」との作者名も書かれている。この「紹○」について岸上は、「連歌に紹と注記があるところから伊地知氏のお話では紹永ではないかとのお説がある」と記している。文明一九年三月廿一日の句との関連もはっきりしないものの、文明頃に活躍した「紹」の付く名の連歌師として浮かび上がってくるのは、やはり『新撰菟玖波集』に一〇句入集し、寛正四年（一四六三）～文明一四年（一四七二）ころの活動が認められる美濃出身の連歌師で、専順の弟子と思われる紹永[6]である。何れにせよ、この書き入れは「静嘉本」が連歌関係者の書写になることを示す有力な証拠なのである。

「相愛本」はより直接的で、題簽の書名下に「宗祇」とある他、本文異筆と考えられる永禄三年の奥書にも、「此一冊宗祇法師抜書侍云々」と記されており、宗祇（一四二一～一五〇二）の抜書説を提示している。宗祇出生以前の書写である東山本の存在からして成り立たない説ではあるのだが、「宗祇」の名前の存在は、この抜書が連歌と深い関連があることを雄弁に物語っているものと思われるのである。

これで十分ではあろうが、「相愛本」にはもう一つ連歌との関連性を窺わせる特徴がある。それは大きさで、二一・一×一六・二糎と、「静嘉本」の二二・一×一三・三糎（縦型の折紙綴葉装は幅細となる）に近いのである。その袋綴写本としてはやや小ぶりと言える大きさも、携帯の利便性を重視する連歌に関係する書物故と考えれば、納得しやすい寸法であると言えるのではないだろうか。

「書陵本」は「相愛本」とは対照的に二七・〇×二一・八糎と大ぶりな本だが、室町から江戸初期の袋綴本としては一般的な大きさである。この大きさだと連歌と無関係なようでもあるが、この本で注意されるのは、本文中に多くの朱合点が加えられていることである。特に「物は尽し」の段では、列挙される単語毎にその右肩にこれが付されているのである。梗概書である『源氏小鏡』には連歌付合語を付す系統のものがあるが、それらの語に朱合点が付される事が多いように、朱合点は連歌付合関連書の多くに認められる特徴である。「書陵本」の合点も連歌の付合の参考になる語を中心に付されていると考えられ、この本独自のことではあるが、やはり連歌との関係性を声なく

伝えてくれるのである。

また「書陵本」の筆跡は、室町後期の高名な連歌師で、能筆としても著名であった里村紹巴（一五二五～一六〇二）の手に通ずる特徴を有しており、その書流を受け継ぐものと考えられる。このこともこの本が連歌師の書写になるものである可能性を示しているのではないだろうか。

「京大本」も二七・三×一八・九糎と大ぶりで、その書風は近衛信尹を祖とする三藐院流に属するものであるが、このことで連歌との関連を考えるのは難しい。その手掛りとなりそうなのは、対校本のものと思われる朱筆の奥書に、連歌流行時の天文一九年（一五五〇）の日付があることである。それで直ちに連歌に結びつけられる訳ではないが、注意はしておきたい。

「東山本」は筆者の可能性が高い後小松院に、応永元年一二月一二日の独吟和漢聯句（続群書類従所収）があるように、連歌を嗜んでいたことが認められるのであるが、形態的にも連歌作品の写本に多い横本であることや、料紙も高級な連歌懐紙清書本に用いられる金泥下絵のある雲紙であることなどは、連歌との関連性を濃密に物語っているのではないだろうか。

このように濃淡の差はあるものの、「抜書」の五伝本は、その書写年代の幅から推定される通り、何れも書誌学的に連歌との関連性が考えられる特徴を有しているのである。

おわりに

推定を確実にするためにややくだくだしく述べ来たったが、「一つ書」の形式や諸伝本の書誌学的特徴などが指し示しているのは、この「抜書」が連歌の参考書として作成されたという事実である。これが何の参考になるのかと言えば、前句とどのようにして付句が繋がるのか、その接合点となる言葉や連想の内の、「和漢の文学作品（ここでは『枕草子』・稿者注）・文化的事柄によって関連あるとされた語と語の関係、また関係づけられている語」である寄合[7]を知るのに役立つのである。

考えて見れば『枕草子』は寄合の宝庫とも言える作品であり、「物は尽し」の段は頭に「一」を付ければ、そのまま連歌寄合書の一項になりうるのである。このことが判れば、岸上が詳しく指摘している、「抜書」が類聚章段の「……は」型は六九段中五〇段を、「……なるもの」型は七六段中三七段も抜いているのに、随感随想録は八九段中九段、経験談は七五段中七段し

か抜萃しないという偏向した傾向が、何故生じたのかという理由も容易に理解出来るであろう。またそれが判った今後は、抜き出された随感随想録や経験談の章段などは、特にどのような点で連歌の参考になると考えられたのかを読み解く作業も必要となってくるであろう。それはもはや『枕草子』自体の研究とは乖離したものであるかもしれないが、その受容史の研究では重要なテーマであるはずである。またこうした「抜書」の制作意図や性格を知らずして、定家本第一類欠脱部分の復元的研究を行ったり、単なる『枕草子』の抜粋として教材に用いたりすることの危険性も、自ずと理解できるはずであろう。

この「抜書」の連歌書としての性格を理解するための読み込み作業をすることは、同時に『枕草子』の連歌受容の実態の究明をも要請するものであろう。総体的な受容とともに、「抜書」の影響力の確認をも迫られているのである。そのことは、現時点では「東山本」書写からそう隔たらない以前とまでしか絞り込めない「抜書」の成立が、連歌史上のどの時点でなら可能なのかを解明することに繋がるかもしれない。

さらに言えば、『枕草子』の抜書本がこの「抜書」ばかりではないことは、先にも記した通りである。これらの抄出の意図も当然問われなければならない問題であろう。それが明らかになってくれば、そこから翻って、『枕草子』の異本系である類纂形態を有する堺本と前田家本の編纂目的[8]を、解明する手掛かりがえられることになるかもしれない。やはり『枕草子』本体の研究にも、「抜書」は無視できない存在なのである。

ここから先は『枕草子』と連歌の研究を志す方にお任せしたいが、作品が保存された器である書物に注目することが、作品自体の研究にとってもどれ程重要で、どれ程役に立つことであるのかを少しでもご理解いただけると幸いである。

『源氏物語』の連歌受容のすごさを物語るのは、『源氏小鏡』を始めとする梗概本の古写伝本数の多さである。『枕草子』における『源氏小鏡』に該当する存在が『清少納言枕双紙抜書』だとも言えるのであるが、その伝本の数は『源氏小鏡』とは比べものにならない。『枕草子』の連歌への影響力は『源氏物語』よりもかなり小さなものであったと考えざるをえない。それでもこの「抜書」は、『枕草子』の連歌における受容の確かな痕跡として我々の前に存在しているのである。

（1）定家本に関する近時の注目すべき業績として、三巻本を定家本として見直して、定家の『枕草子』に対する意識を読み解いた、渡邉裕美子氏「藤原定家の『枕草子』」（『中世の随筆―成立・展開と文体―』竹林舎、二〇一四）がある。

（2）猶、榊原「枕草子抜書」（『解釈』二八―一〇、一九八二・一〇）は、同書の紹介を目的とした一頁のみのものである。

（3）定家本諸本の本文確認については、杉山重行氏『三巻本枕草子本文集成』（笠間書院、一九九九）を参照した。

（4）定家本第二類の勘物は「有産養事」までしかない。これも第一類本の欠落部分の姿を伝えるものと考えられるかもしれない。

（5）連歌を嗜んでいたと思われる家の旧蔵本である。拙稿「新収資料紹介　秋篠月清集」（『国文学研究資料館報』四一、一九九三・九）を参照いただきたい。

（6）廣木一人氏『連歌辞典』（東京堂出版、二〇一〇）の廣木氏執筆「紹永」項の説明が詳しい。猶、万里集九『梅花無尽蔵』に「連歌之紹永表号歌并序」がある。

（7）注6所掲『連歌辞典』の廣木氏執筆「寄合」項に拠る。

（8）楠道隆は前出「枕草子異本研究（下）」において、この「抜書」の抄出のあり様が、「堺本の如き類纂整理への一歩手前の作業として眺められる」と指摘している。

【補記】『清少納言枕双紙抜書』諸伝本の調査に際してお世話になった、所蔵機関の方々に篤く御礼申し上げます。